
デッド&リバーズ

スライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デッド&リバー

【Nコード】

N2477C

【作者名】

スライム

【あらすじ】

ライルーク大陸、この大陸では人を生き返らせることができる魔法を使う男がいた。人が生き返ることは本当に素晴らしいものなのか？電撃文庫作品「キノの旅」を土台にした、シリアスファンタジ

プロローグ

ライルーク大陸

この大陸で奇妙なことが起こっている。

死んだ人間が甦る^{よみがえ}。

もちろんゾンビなんかではない。

ちゃんとした人間である。

このことは大陸中で話題となったが、実際に甦る^{よみがえ}ところを誰も見たことがないので、次第にこの話題は消えていった。

この話題の中で出てきた人物、レイモンド・クニール。この者が人を甦^{よみがえ}らせることができるのだと言う。レイモンドは昔、軍事医学技術研究員であって、本物の人間を殺し、人体実験を行っていたという。

人体実験をレイモンドは陰で行っていたのだが、あるとき、研究員の一人に見つかってしまい、軍からライルーク大陸の南端に位置するクロム砂漠へと追放された。

クロム砂漠とは、とても人間が生きていける環境ではなく、死刑囚の人間が処刑代わりに連れて行かれているともウワサされている。一年中猛暑が続いている砂漠だ。

追放されたレイモンドは、ひそかに持っておいた秘薬を飲み、自分の姿を変え、そしてなんと、自力でクロム砂漠を抜け出した。

当然、誰もレイモンドが砂漠を抜け出したことなど知らない。

これは姿を変えたレイモンド、いや姿を変えたときに名前も変えたので、その名前で書いておこうか。

これはリマ・レイアンが旅の途中で出会った町や人々を描く旅の物語。

春・・・友人の話

ライルーク大陸の南西に位置する街、スウィード街の中に、灰色のフードをかぶった青年が通りを歩いていていた。スウィード街は、主に果物や野菜がおいしいことで有名である。

通りは栄えており、数多くの人々と青年はすれ違うが、青年はすれ違う人々に比べると、背が一回り大きかった。175センチほどはあるだろう。

青年は外見だとフードで顔が覆われており、表情どころかどんな顔なのかもわからない。時々風が吹くと、紺色のズボンと白い長袖シャツを着ていることがわかった。右の太腿には革製のホルスターが吊っており、その中には細長い黒色の銃が入っていた。

青年は少し目つきが鋭く、青色の髪をしており、瞳は少し明るい青、スカイブルーとでも言うべきか、顔つきは普通で、パツと見ると華奢な体をしていた。

「この街は実りも豊だし、平和そうでいいな」
青年は誰にも聞こえぬようにつぶやいた。そして青年は今日泊まる場所、できればアルバイトをしようと街を探索し始めた。

青年が街を探索し始めた同時刻、農場で働いている男がいた。男は見たところ十八歳ほどの青年で、華奢な体格の割には、腕の筋肉などは相当のものだった。

彼は家族も彼女もいなく、一人で自分の土地を耕している。とはいっても、土地は広大に続いており、とても一人でできる量ではない。手分けをしても、三人分はあるぐらいの広さだ。

その量を彼は一人で毎日の日課のようにこなしていた。そして今、ちよつど作業を終え、自分の家で一服しようとしたそのときである。街へ続く道から、一人の男が現れた。身長もさつきまで作業をして

いた男と同じぐらいで、体格もほとんど一緒に、年齢もさほど離れてはいなかった。

「よっ！ロバート。今日もお疲れさん、お前もよく耐えられるよな農業なんて。お前も街の方に来たらいいのによお」
ロバートと呼ばれた青年が苦笑する。

「まあね、でも俺は父さんと母さんが死んだときに後を継ぐって決めたし……きつと二人とも天国で好きなことをしろって言っているのかもしれないけど、やっぱり俺はこの農業を続けたいんだ」

基本的にスウィード街から少し離れた住宅地に住んでいる人々は、農業をしている者が多く、息子や娘は後を継ぐことが普通だ。しかし、街の方からやってきた男は違った。

「わかった。お前がそう思ってるんなら両親もきつと言んでいるだろうよ。でももし、やめたくなったら俺のパン屋に來いよ。そのときは一緒にパンを焼こうぜ」

「うん、ありがとう、コルノ」
コルノと呼ばれた男は照れを隠しながら微笑した。

コルノもロバートと同じ農業一家の生まれのだが、農業を継がずに街でパン屋を営んでいる。小さなパン屋だが、売れ行きはそこそこのいいようだ。

今日はパン屋が休みだったため、散歩ついでにロバートの家に寄ったのである。

「そんじゃあ、明日のこともあるから今日は帰るわ。たまには俺のパン食いに來いよ、いつでも待ってるからよ」

「ああ、わかった。じゃあ来週あたりにでも行こうかな」
二人はお互いに微笑した後、手を振って別れた。

「あー悪いねえ旅人さん。この街の給料は時給制じゃなくて週給制なんだ。だから一週間は働いてもらうことになるが、いいかい？」
「はい、わかりました」

青年は工事現場の監督にアルバイトとして雇^{やと}って欲しいと頼んでいた。(ちなみになるべく時給で)

そして青年が、明日から来ます、と監督に言った後、今日取っておいた安い宿屋へと歩き出した。そしてポツリと

「……マジっすか」

とつぶやいた。

一週間後、ロバートはコルノを訪ねに街への道を歩いていた。荷物はなく、まるで近所の友達の家に遊びに行くようだった。服装はいたってシンプルで、深緑(ほとんど黒)の長ズボンと、緑色のセーターを着ていた。

「フフ、本当に一週間後に会いに行つて、きつとあいつ驚くだろうなあ」

ロバートが期待に胸を膨らませていると、いつの間にか街に着いており、すれ違う人々の中から不吉な言葉を聞いた。

「今日の朝っぱらのパン屋の火事はひどかったなあ」

「なんでもパンを焼いているときにオーブンが爆発したんだって」
「遺体^{くらくこ}が黒焦げ^{くらくこ}で出てきたらしいけど、男だったらしいぜ。かわいそうに」

ロバートはさつきまでの期待は消え去り、ものすごい勢いで不安が心を侵食した。パン屋と聞いた時点で、すでにロバートの足は止まっていた。

(まさか……そんな、まさか……!)

ロバートは何も考えず、とにかくコルノのパン屋へと全速力で走っていた。周りの何人かの人^{ひと}が迷惑^{めいわく}がったり、驚いたりしていたが、ロバートは無視した。

コルノのパン屋に着くと、そこはもうパン屋ではなかった。そこに建物はなく、唯一黒こげた看板だけが倒れていた。建物があつた

場所は、まるで荒野のように荒れ果てており、所々に木が焦げて粉々になってしまい、地面と一体化しているところがあった。

この街では火事が珍しいのか、まるで観光名所でも見るように、数人の野次馬達が焼き果てた跡を眺めていた。

ロバートは焼き果てた土地のほぼ中央に立ち、砂をゆつくりとすくいとった。

「う、うそだろ……ハッ、アハハハハハ。こんなドツキリいらなんだよ、コルノ。俺は……先週お前に会ったばっかなんだぞ。こんなこと……信じられるもんかあああ！」

ロバートの目からは知らぬ間に涙が溢れていた。そして

「うわああああああ……！！！」

ロバートは地面にうずくまり、号泣した。

夕方頃、ロバートは顔がふやけた状態で家への道を歩いていた。ロバートの口からは、少しの鮮血があった。泣きすぎで血を吐いてしまったのだ。

結局、ロバートは泣くに泣き、野次馬達も気を使うように元パン屋から離れていった。そして、まだ目の前の事実が受け入れられないが、とりあえず家で頭を冷やそうと歩いていたのだ。

ロバートが歩いていると、目の前に灰色のフードをかぶった青年が立っていた。ロバートのほうに向いており、まるでロバートを待っていたかのような様子だった。

「大切な人でもなくされましたか？あなたの心に大きな穴がポツカリと空いていますよ」

青年がクスクスと笑いながら言った。

（何言ってるんだ？この人）

ロバートは無意識に首をかしげながら、怪訝そうな顔で青年を見ていた。

「おっと、当たっていたようですね。これは失礼」

青年はフードを外し、ペコリとロバートに頭を下げた。青い髪が風によつてたなびく。

「あんた・・・何者だ？」

「今日の火事で亡くなったのですか？あなたの大切な人は？」

ロバートは火事のことを思い出し、なぜこいつが火事のことを知っているのか疑問に思った。

そして最終の結論が出た。

（こいつが・・・こいつが、コルノを・・・！）

ロバートは青年に向かって走り出し、青年の胸ぐらを掴んだ。

「お前か・・・お前がやつたんだな！」

顔を赤くしながら怒るロバートに青年は少し驚きながらも、青年は首を横に振って否定した。

「違います、考えて御覧なさい。あの火事はオープンが爆発して起こったものです。ですから誰も放火していません。あなたの大切な人は事故で亡くなられたのですよ」

ロバートはハツとした様子になり、次第に足に力が入らなくなり、地面に跪ひざまずいた。

「これは本当に失礼しました。あなたのつらい過去を思い出させてしまつて・・・」

「・・・もういいですよ。俺はもう帰ります」

ロバートは立ち上がった。

「何かおわびでもさせてもらえないでしょうか？」

「いまさら・・・あなたにおわびをされなくてもいいですよ」

ロバートが青年とすれ違ったその時、信じられないことを青年は小声で言った。

「あなたの大切な人が生き返つても、ですか？」

ロバートはピタリと足を止めた。そして信じられない目で青年を見た。しかし、人が生き返るなど馬鹿げている。ロバートはそう思い、青年に怒鳴った。

「ふん！一体何のジョークだ。今度は殴り飛ばすぞ！！」

青年は冷静さを保ったまま

「残念ながらジョークではありません。私は死んでしまった人を生き返らせる術を持っています。まあ、口で言っても信じてはもらえないでしょうが……」

ロバートは青年の言うことを信じて良いのか迷っていた。普通に考えても、この青年の言っていることはおかしい。しかし、この青年の冷静さを見てみると、嘘ではないように感じるのだ。

ロバートが迷っていると、青年が、ああそうだ、と口を開いた。
「今晚あなたの部屋に泊めてください。そしてあなたに術を見せ、明日の朝にあなたの大切な人が生き返っているのをご覧に入れましょう」

ロバートは数秒考えた後、こう言った

「……わかった。なんで俺の家に止めなければいけないんだ？」

「等価交換という言葉をご存知ですか？ 私はあなたの大切な人を生き返らせます。その代価として、あなたには私に食事と寝床を供給してもらわなければ」

人を生き返らせる代価が、それだけでいいのかとロバートは思ったが、全財産を払うよりかはだいぶマシだと思った。

「わかった。今晚、お前を泊めてやる。だが、失敗したら……
・その時はわかってるな？」

「ええ、わかっております。もし失敗したならば私を殺してくれても構いませんので」

ロバートの家に、二人の男が入った。家は一戸建てで、小さな小屋のような家だった。

「そういえば、お互い名前を聞いていなかったな」

「確かにそうですね。私はリマ・レイアン。それ以上のことは聞かないでいただきたい。事情が事情ですので」

「わかった。俺はロバート・セリム。フアーマーだ」

リマはフードを脱ぎ、近くのイスに引つ掛けた。そしてロバートに勧められ、テーブルに座り、お茶をもらった。

「じゃあ早速その術とやらをみせてもらおうか」

「ええ、わかりました。その前にロバートさん、あなたに言うておくことがあります」

リマは続けた。

「仮に生き返ったあなたの大切な人が、あなたに何をしようと、それこそ殺されようと、その者がどうなっても、私は一切の責任を負いません。いいですね？」

「……ああ、わかった」

「ではロバートさん、ここにあなたの大切な人の名前を書いてください。そしてその紙を四つ折りにして私に渡してください」

ロバートはリマに言われたとおり、リマに渡された紙に、ペンでコルノ・ライアンと大きく書き、その紙を四つ折りにしてリマに渡した。

リマはポケットから赤と黒が混ざった色をした布を取り出し、机に広げた。大きさは縦二十五センチメートル、横二十五センチメートルの正方形だった。布には魔方陣のようなものが描かれており、リマはロバートに渡された四つ折りの紙を、布の中心に置いた。そこはちょうど魔方陣の中心の位置だった。

「この世の精霊達よ、古の力を解放し、さまよう魂を救いたまえ！」
リマが唱えると、四つ折りされた紙切れが、光に包まれ、次の瞬間、紙は燃えてなくなってしまった。

「これで明日の朝、あなたの大切な人はあのパン屋の前に立っていることでしょう」

「……そうか」

その夜、リマはぐっすりと眠っていたが、ロバートはずっと胸の前に手を当て、一睡もせずじただただ祈っていた。ロバートはリマが言った事に少し不安を抱いていたのだ。

「仮に生き返ったあなたの大切な人が、あなたに何をしようと、それこそ殺されようと、その者がどうなっても、私は一切の責任を負いません。いいですね?」

もはやロバートにとってはコルノが生き返る、生き返らないなどどうでもよかった。あの青年の言うことだから、失敗はまずないだろう。しかし、本当にコルノが生き返って、本人が喜ぶのだろうか、とロバートは考えていたのだ。もし、コルノが生き返っても喜ばなかったら……それ以上はロバートは考えず、ただただ祈った。

翌朝、つまり太陽が地平線から顔を出したとき、ロバートは街のパン屋の焼け跡へと走っていった。街はまだ誰もおらず、ロバートに気づいた人もいない。

ロバートがパン屋の焼け跡に行くと、そこには人の影が一つあった。

(コルノ!!)

ロバートは興奮を何とか抑えながらその人影にゆっくりと近づいた。「コルノ……?」

ロバートが恐る恐る人影に話かけると、人影がロバートの方に振り向いた。ロバートの顔が喜びの笑顔に変わった。その人影はコルノ・ライアンだったのだ。

「コルノ!!」

喜びに溢れているロバートとは反対に、コルノは焼け跡のパン屋を見て絶望している様子だった。

「ロバート……ここは……どうなってんだ?俺のパン屋はどこだ?」

「お前はパン屋の火事で死んだんだ。それで、リマって人に生き返らしてもらったんだぜ!」

「生き返った?……嘘だ!嘘だ!これは何かのドッキリカメラなんだろう?なあロバート。お前も何かの番組に出されたんだろ

「？じゃあ本物のパン屋はどこなんだよ？俺の命よりも大切なパン屋はどこにいったんだよ？」

「ち・・・違うよ、コルノ。パン屋は本当に・・・」

「焼けたって言うのか、お前も。大の親友のお前もそんなひどい嘘を言うようになったのか!？」

「本当に焼けたんだよ、本当に・・・」

「おい、それ以上冗談を言ってみろ！オレの宝を侮辱したんだから、たとえ番組だろうとお前を殺してやる！」

「そ・・・そんな」

「さあロバート、親友のロバート。パン屋はどこだ？俺の宝は」

ロバートは絶望の淵に追い込まれた気分だった。ロバートはパン屋を宝にしていた。そのパン屋を失うことなど信じるはずが無い。いや、信じたくない。そしてその親友はパン屋を教えないと殺すという。あの目は殺人の目だった。本当に殺すつもりだ。

「ああ、悪かったよコルノ。実は北のほうに移住させられたんだ、お前のパン屋。だから後で一緒に行こう。まず俺の家に来いよ。朝飯まだだろ？」

ロバートは作り物の笑顔でコルノを説得した。コルノは自分の腹をさすった後

「良かった、俺のパン屋、やっぱりあったんだな。妙だとは思ったぜ。その番組にガツンと言っというてやらねえとな。ま、その前にお前の家で朝飯だ」

「ああ、そうだな。早く食べて行こう」

家に帰ると、そこにはリマの姿はなかった。おそらくどこかに去ったのだろうとロバートは悟り、二人分の朝食を作り、コルノと共に食べた。

食べ終えた後、ロバートは、身支度してくる、とコルノに言って、自分の部屋に入った。そして部屋の倉庫を開いた。

倉庫の中からロバートが取り出したのは、リボルバー型の細身の

銃だった。

「コルノ、お前には大変なことをさせてしまった。だからさ、あの世で俺は罪を償^{つく}うよ。お前は天国、俺は地獄に行くんだ。お前もパン屋がない人生なんて嫌だろ？」

ロバートはそうつぶやいた後、右手に銃を持って自分の部屋を出た。

ロバートはコルノに銃口を向けた。その表情はとても悲しげだった。

「お・・・おい！どういうつもりだ？ロバート。俺をどうするつもりだ！？」

「ごめんよ、コルノ。お前もパン屋を失った人生なんて嫌だろ？」

ロバートはコルノが何かを言おうとしていたが、コルノの言葉を聞かずに引き金を引いた。

ドン！

コルノはイスから仰向けに倒れた。次に打たれた頭から鮮血が床に広がる。ロバートは気分が悪くなり、床に嘔吐^{おうと}した後、自分の額に銃口を突きつけた。

「・・・コルノ、あの世でまた会おう」

ロバートは目を閉じ、ゆっくりと引き金を引いた。

太陽が昇り、街中が盛んになったとき、小屋には頭を打たれた二つの体が寝転がっていた。一人は悲しげな表情で、手に銃を持っていた。もう一人は驚きの表情をしていた。

スウィード街から東に向けて歩いている青年がいた。青年から見て右の方向に海が広がっており、左には森が広がっていた。青年が歩いている場所は、ちょうどその真ん中であり、砂浜だった。

青年は立ち止まってポケットからペンダントを取り出し、そこに
いる一人の青年と一人の女性の写真を見た。二人とも笑顔でこつち
に手を振っている。

「友……か。かけがえのない存在なのかもしれない。だが・
……」

青年は再び東に向けて歩き始めた。

「私には関係のないことだ」

森には冬眠を終えた動物達が森中を走り回っていた。

夏・・・村長の話

ライルーク大陸の南東に位置する街、ニューレース。その町外れには小さな村があった。村の名前はニューレースから取ってニューレ村。この村では漁業が盛んで、頻繁ひんぱんにこの村から小さな船が沖に出ている。村の中には果樹園や畑があり、人々は自給自足の生活をしていた。

ある日の夕方頃、その村に灰色のフードをかぶった華奢まじやな体格の青年がやってきた。青年は紺色の長ズボンと白い長袖シャツを着ており、青髪で、目はスカイブルーのような色をしていたが、フードによって青年の目や顔の表情はわからなかった。右の太腿ふとももには革のホルスターが吊っており、そこに黒い細身の銃が入っていた。

青年が村に入ると、まず宿を探そうと思ったのだが、村中の人々が途方に暮れているところを見て不思議に思い、近くにいた初老の男性に話しかけた。

「すみません、旅の者ですのでこの村のことを知らないのですが・・・みなさん元気がないですね。何かあったのですか？」

「どうもこうも、この村の村長さんが交通事故で死んでしまったんじゃないよ」

「交通事故・・・ですか？」

「ああ、村長さんは中年ぐらいの男でな、少々小太りなんじゃが、みんなに好かれとった。あの人がいたからこそ、この村が今日も平和なぐらいじゃ」

「みんなに好かれていたんですね」

「ああ、努力家でもあったしう。あの人がいなくなってからみんなも元気がないんじゃない。これからどうしようってな」

「・・・そうですか、お気の毒に。わざわざありがとございまして」

「旅人さん、今晚の寝床は決まったか？よかつたらわしの家に来な

さい。余談じゃが、この村には宿なんてないぞ」

「いいんですか？」

「一人や二人ぐらいかまわんよ。もうすぐ夕飯時じゃ。ついてきなされ」

青年は老人に案内され、老人の家へと向かった。青年はその間も辺りを見回していたが、やはり人々は元気がなかった。

青年は老人の家で夕飯を食べた。夕飯は魚のムニエルとシーフードサラダだった。青年は徐々に携帯食料以外の物を食べて、とても満足した。

夕飯を食べ終えた後、青年は老人に言った。

「とてもおいしかったです。ありがとうございます。お礼に何かさせてください」

「はっはっは、別に構わんよ。気持ちだけで十分じゃ」

青年は次に信じられない事を言った。

「村長さんを生き返らせることができますか？」

老人は驚きの表情に変わった。しかし、老人はすぐに腹を抱えて笑い始めた。

「はっはっは。面白い冗談を言う旅人さんだな。じゃが気持ちだけで結構じゃよ、ありがとうな」

青年は冷静さを保ったまま老人に言った。

「残念ながら冗談ではありません。まあ口で言っても信じてはもらえないでしょうが・・・」

「じゃあ・・・本当・・・なのか？」

「ええ、泊まらせてくれたお礼です。今からその術をお見せしましよ」

青年はポケットから赤と黒の混じった布を近くのテーブルにひいた。縦二十五センチメートル、横二十五センチメートルの正方形の布で、布には魔方陣が描かれてあった。

「あなたに村長さんを生き返らせるさいに言うておくことがあります

す

「……………」

「仮にその村長さんが生き返っても、私はその責任を一切負いません。いいですね？」

「ど……どういことじゃ？」

「仮にその村長さんが自分の運命あじがに抗い、暴れまわろうと私は知りません。いいですね？」

「あ……ああ、わかった。あの村長のことだ。そんなことはしないさ」

「では、この紙に生き返らせたい人の名前を書いてください」

老人は青年から渡された紙に、大きく村長の名前を書いた。

「次にその紙を四つ折りにして、私に渡してください」

老人はその紙を青年に言われたとおり四つ折りにして、青年に渡した。

青年はその紙を布の真ん中に置いた。その位置はちょうど布に描かれた魔方陣の中心だった。

「この世の精霊達よ、古の力を解放し、さまよう魂を救いたまえ！
青年が唱えると、四つ折りされた紙切れが、光に包まれ、次の瞬間、紙は燃えてなくなってしまった。

「これで明日の朝、村長さんは彼の墓の前に立っているでしょう」

「……………なんでだろう、あまり嬉しさの実感がないんじゃない？」

「ふふ、明日になればそんなことなど考えてないですよ」

翌朝、老人はまだ寝ている青年のことなど無視して、村長が眠っている墓へ向かった。初めは歩いていたが、だんだんと歩行速度が速くなり、最後には全力疾走していた。

老人が息を切らしながら墓場に着くと、そこには大きな人だかりができていた。老人が「何があったんじゃない？」と近くの人に聞くと、近くの人には興奮しながらこう言った。

「どうしたもこうしたもねえよ、じいさん！村長さんが・・・村長さんが生き返ったんだ！しんじらんねえな」

老人がひとだかりの中心に近づくと、そこには死んでいるはずの小太りで中年の男が、呆然と立っていた。辺りからは喜びの声が溢れていた。

「そんな・・・まさか、信じられん。本当に生き返らせるとは・・・」

老人は感謝の涙を浮かべ、そして脱力し、地面に座り込んだ。

「・・・は、はは・・・ありがとな、青年さん」

老人は涙を流しながら、この場にはいないはずの青年に感謝の祈りをささげた。

周囲の人々の興奮が冷めたとき、村長である男は、全員に聞こえるように言った。

「どうやら私は生き返ったようだ。だが、少し頭を冷やしたい。しばらく一人にさせてくれ」

村長がこの村の小さな川に向けて歩き出すと、人々が川のほうの道を開けた。そして村長の背中が見えなくなったとき、人々は

「よし、村長の復活記念に、パーティでもやるう」

「賛成だ！」

「早速準備しましょ」

などと言って、パーティの準備をし始めた。

村長は川のほとりにたどり着くと、ほとりに座っている青い髪の青年を見つけた。青年は村長に気づいたようだったが、村長のほうに振り向かず、川の流れを見続けていた。

「あなたが村長さんですか？」

青年が川を見ながら村長に聞いた。

「え・・・ええ、あなたは？」

「私は旅の者で、あなたを生き返らせた者です。この川のせせらぎ

「がきれいなので、見終わった後に北へ向かうつもりです」

「あんたが・・・あんたがわしを生き返らせたのか・・・？」

「ええ、そうですけど」

青年がさらりと言った後、村長は叫びながら青年に飛び掛った。

しかし、青年はそのことを予想していたのか、右に転がり、村長は川へと水しぶきを立ててダイブした。

「く・・・くそお！」

村長が水の中から顔を出し、青年を見ると、自分が細身の黒い銃を突きつけられていることがわかった。

「どうやら生き返ったことを恨んでいるようですね。死ぬ前に何かあつたんですか？」

「ふ・・・ふん！お前に話してやることなど・・・」

「あの世に行きたいんでしょう？ではこうしましょう。私に何も話さないと言つのであれば、ナイフでああなたの体を切り刻みます。洗いざらい話してくれば、この銃で心臓を一発で打ち抜きます。さあ、どちらがいいですか？」

村長は何か考えていたが、やがて舌打ちをし、話し始めた。

「わしは村長に選ばれた。村長と言われたから、わしは人のためならなんでもしたよ。そのおかげでこの村で人望は厚くなったし、みんなから敬おやじわれた。だが、人々はそのことをいいことに、あらゆる仕事をわしに押し付けてきた。最初はまだマシじゃったが、だんだんエスカレートし、とても一人では出来る仕事ではなくなった。手助けを頼もうかと思つたが、みんなからは、村長なら大丈夫ですよ。がんばってください、と励まされるだけだった。励まされるだけでは何も出来はしない。とうとうわしは村長が嫌になり、交通事故に見せかけた自殺をした」

村長はため息をついた後、続けた。

「だからわしはもう生きたくはないんじゃない。じゃからわしは・・・
・・・お前を憎む！」

村長は濡れた格好で、自分の命の危険もかえりみず、青年に襲い掛

かった。

どさっ！

村長は青年に襲う前に川の上で倒れた。やがて川の水がじわじわと赤く染まる。村長は心臓を打ち抜かれており、すでに息はしていない。青年の手には魔方陣の布が握られていた。魔方陣の力で、村長の心臓を停止させたのだ。

その後、村長の遺体が見つかり、人々は泣くに泣いた。

青年は北に向けて歩いていった。一面砂浜で広がっており、東には海が広がっている。キラキラと容赦なく太陽が砂浜を照りつける。

青年は立ち止まって、ポケットからペンダントを取り出し、そこにいる一人の青年と一人の女性の写真を見た。二人とも笑顔でこっちに手を振っている。

「人望……信頼……か。確かに大切なのかもしれない。だが……」

青年は再び北に向けて歩き始めた。

「私には関係のないことだ」

海ではイルカ達が、気持ちよさそうに泳いでいた。

秋・・・犠牲の話

ライルーク大陸の北東。ここはライルーク大陸の中で唯一、発展途上している地域だった。なので、天気予報もできなければ、この地域には電気という物もない。ただ人々は自然に体を任せる生活をしていた。

その地域の中にある町、スジウム。この町にある日、灰色のフードをかぶった青年がやってきた。青年は華奢な体つきをしており、身長は175センチメートルほど。青色の髪、瞳はスカイブルーのような明るい青色をしており、目つきが少し鋭かったが、フードで覆われていたので、他人からは髪や瞳や目つきなどわからなかった。青年は紺色のズボンと白い長袖のシャツを着ており、右の太腿には革のホルスターが吊ってあった。その中には細身の黒い銃が入っていた。

青年は町に入った途端、大勢の人の列がこつちに向かって歩いてくるのを見た。列の中にいる人たちは全員男で、全員肩に重そうなリュックを担いでいた。

列は青年の前に来ると、立ち止まった。

「こんなところに旅人さんか？悪いが私達はこの町を捨てるよ。もうすぐここに天罰が下るからな」

列の先頭にいた老人が青年に言った。どうやらこの町の長のようだ。

「天罰……ですか？」

「ああ、天罰じゃ。もう生贄に捧げる者もいなくなってしまったのでな。わしらはこうして逃げるしかないんじゃないよ」

「……………その話、詳しく聞かせてもらえますか？」

「あんたに話しても何の得もないよ。でもまあ、旅の土産にはいいかもしれんな」

老人はそう言うと言った青年に、集会所に案内する。そこで話そう、と言った、列は踵を返して町のほうに戻っていった。

「天罰……まさか、あれなんじゃ……？」
青年はそうつぶやいた後、首をブンブンと横に振って、列についていった。

集会所は木造建築の大きなドーム上の建物だった。そこにぐるりと囲むようにして男達が座っており、青年はその円の真ん中に座らされていた。向かい合うように老人も座っていた。

「では話してやろう」
老人は一度咳払いをしてから、語り始めた。

この町には、ちょうどこの時期に、女性一人を生贄の祭壇に捧げなければ、神の天罰が下ると言われていた。過去を振り返ると、確かに生贄を捧げていない時期は、天罰である暴風雨が来たようだ。それからというもの、この時期に町の中から女性一人を生贄にする掟おきてができた。しかし今回、生贄に捧げようと町中の女性を探し回ったが、一人もないことを知った。どうやら前の時期の生贄で、女性を全て使ってしまったらしい。女の子供も探し回ったが、一人もいなかった。子供を生む女性を生贄に使ってしまったのだから、当然と言える。

老人は最後にこう言った。

「お前さんとわしを囲んでいる者が、町全ての人じゃよ」
青年が周囲をぐるりと見回した。パツと見ても三十人ほどしかない。誰もが二十代〜四十代ほどの男性だった。

「故郷を捨てるのは惜しいが、やむをえんと考えた。だからこの町に天罰が下る前に逃げようとしていたのじゃ」
「なるほど、よくわかりました」

青年は同情しているわけでもなく、素っ気無く答えた。

「旅人さん、あんたはこの町の初めての客じゃ。どうかわしらの最後の晚餐ばんさんにお付き合あいしてくれないだろうか？」

青年はうなずいた。そして老人の命令で、周りの男性がすぐに晚餐

の用意をし始めた。

集会所には多くの食べ物と酒が置かれた。

「では、この町のすばらしさを思い出しながら、思う存分食べて飲んでくれ。乾杯！」

老人が杯こかずきを掲げてそう言うと、男性達が好きな食べ物を手に取り、食べ始めた。青年も七面鳥を丸焼きにしたものを手に取り、食べた。その後ワインのようなものを飲んだ。なかなか美味しく、青年は満足していた。

しばらくして、男達の腹が満足すると、この町のことについて仲間と語り始めた。中には泣いているものまでいた。

青年が泣いている男を見ると、老人が青年の隣に座った。

「旅人さんにはわからんかもしれんが、わしらは故郷というものをとても大切に思っておる。わしもみんながいなくてところじゃと、泣いていたかもしれんな」

「……そうですか」

青年はしばらく考え事をした後、

「町長さん、ちょっと二人で話をしませんか？」
と老人を誘った。

「ならばいいところがある。ついてきなさい」

老人は立ち上がり、集会所の外へと出て行った。青年はその後についていった。

老人が案内した場所は、町の中の小高い丘の上だった。星が綺麗きれいに瞬いており、青年が今まで見てきたどの空よりも綺麗だった。

「ここがわしらの町の中にある、唯一の観光名所と言ってもいいかもしれんのう」

「綺麗な空ですね。私が今まで見てきたどの空よりも綺麗ですよ」
「それはよかった。あの谷を見てくれ」

老人が指差したところは、丘から見える、丘から少し離れた谷だっ

た。暗闇なので谷があることぐらいしかわからない。

「あそこの谷が生贄の場所なのじゃ」
「なるほど」

青年が谷のほうを見ていたが、やはり谷の底は暗くて見えなかった。もしかすると、昼間に見ても、谷底は見えないのかもしれない。

「さて、話とはなんじゃ？わしを呼び出したからには何かあるんじゃないろう？」

老人の真顔を見て、青年は微笑しながら話し始めた。

「今回の晚餐でいただいた食事とお酒、とてもおいしかったです。ありがとうございますました」

「・・・言いたいのほそれだけか？」

「いえ、そのお礼をしたいもので・・・何かないですか？何でもしますよ」

老人は青年の言葉を聞き終えると、ハツハツハと笑い始めた。

「ありがとう、気持ちだけ受け取っておくよ。言いたいことがあるとすれば、すぐにこの町を抜けたほうがいいってことじゃな」

「・・・そうですか」

「ああ、なるべくなら町を救ってほしいがな。お前さんもそんなことはできんじゃないろう？さあ、集会所に戻ろう。あやつらが何をしておるか気になるのでな」

老人が帰ろうと踵かかとを返して歩き始めたとき、青年が信じられない言葉を言った。

「私のお礼が、人を生き返らせる、てことでもですか？」

老人はピタリと足を止め、青年のほうに振り向いた。

「私は人を生き返らせる術を持っています。まあ口で言っても信じではもらえないでしょうが・・・」

「ハツハツハ！面白い冗談を言う旅人さんだな。話し相手がわしじやなかったら、今頃殺されておったぞ」

笑っている老人に対し、青年は真顔だった。

「残念ながら冗談ではありません。では、こうしましょう。今から

集会所の人たちを集めてください。集会所で私とその術をやってご覧に入れましょう」

「……………」

老人は始め戸惑っていたが、青年の口調が嘘ではないように聞こえたので、急いで集会所の方へと走っていった。

青年は集会所の方へとゆっくり歩きながらこうつぶやいた。

「天罰……か。毎年この時期に起こる暴風雨、ウィングサークルを知らないのだろうか」

青年が集会所に入ると、男達が円を作って座っており、中央には木のテーブルが置いてあった。テーブルの近くに老人が立っており、青年に手招きした。

青年がテーブルの前に立つと、老人が口を開いた。

「さあ、やってくれるか？」

「ええ、わかりました」

青年はポケットから赤と黒の混じった布を取り出し、テーブルの上に広げた。布は縦二十五センチメートル、横二十五センチメートルの正方形で、布には魔方陣のようなものが描かれてあった。

「では、この紙に生き返らせたい人の名前を書いて、四つ折りにして私に渡してください」

「一人だけか？」

「……………そうですね、今回だけは特別に複数で結構です。何人でもいいですよ」

老人は青年から紙を受け取った後、町にいた女性全員の名前を、まるでリストでも作るかのように書き込んでいった。紙は表だけではならず、両面にびっしりと名前が書かれた。老人は名前で埋まった紙を四つ折りにして、青年に紙を渡した。

青年はその紙を受け取ると、布の中心に紙を置いた。そこはちょうど魔方陣の中心の位置だった。

「この世の精霊達よ、古の力を解放し、さまよう魂を救いたまえ！」

青年が唱えると、四つ折りされた紙切れが、光に包まれ、次の瞬間、紙は燃えてなくなってしまった。

「これで明日の朝、生贄の場所で、名を書かれた者達は生き返っているでしょう」

「ま・・・まさか、本当にやってくれるとは・・・」

「いえいえ、代価を払ったままでです」

夜明け前、青年はがばつと飛び起きた。周りには男達がぐっすりと眠っており、いびきがうるさい。

「・・・来たか」

青年は自分の胸をぎゅっと握った。ものすごい胸騒ぎがするのだ。

青年は灰色のフードをかぶった後、集会所から音を立てずに出ていき、空を見上げた。空は分厚い黒い雲で覆われており、まるで今にもその雲が地面に落ちるようだった。

「夜明けから少しすれば来るな」

青年はそうつぶやいた後、町の外のほうへ歩き始めた。集会所では、まだ男達がいびきをかきながらぐっすりと眠っていた。

町の外に出ると、青年はポケットからペンダントを取り出し、そこにいる一人の青年と一人の女性の写真を見た。二人とも笑顔でこちらに手を振っている。

「犠牲・・・か。私を恨んでいるのだろうな、お前は。だが・・・」

青年は西の方角へ歩き始めた。

「私には関係のないことだ」

青年が歩いている場所には、数多くの紅葉が地面に落ちていた。

ウイングサークル。台風やサイクロンと同じ原理で生じるという暴風雨。毎年秋ごろに、ライルーク大陸の北東部に上陸すると言われている。

北東部には、多くの湖があり、また、海の近くには山などがない

ので、津波と似た現象も数多く見られる。海の周辺に町が集中している
るので、波に飲まれる町も少なくはなかった。

夜明けから約一時間後、雨と共に、スジウムの町をウイングサー
クルが襲った。

冬・・・恋愛の話

ライルーク大陸北西の町、デルカ。この町は、毎年冬に美しい氷のオブジェが作られていることで有名である。

この氷のオブジェを見せる祭りが始まる日の明け方、灰色のフードをかぶった青年が、この町のある青年の男と、暗い路地裏で話をしていた。

青年は青色の髪、スカイブルーの瞳をしており、冬というのに黒のズボンと、白の長袖シャツしか着ていなかった。しかし、青年は寒そうな様子を見せてはいなかった。

青年のズボンには革製のホルスターが吊っており、そこには細身の黒い銃が入っていた。

「では、その人を生き返らせる前に、あなたに一つだけ言うておくことがあります」

「なんだよ？」

「仮に生き返った者が、彼女にフラれようと、あなたを恨み、憎もつと、私は一切の責任を負いません。いいですね？」

「・・・・・・ああ、わかった。あいつに限って、そんなことはしないさ。きっと彼女も喜ぶはずさ」

青年は男の言葉を聞いた後、机の代わりとなるものを探し、見つけたドラム缶の上に、縦二十五センチ、横二十五センチの正方形の布を広げた。その布には魔方陣のようなものが描かれていた。

「では、この紙に、あなたの生き返らせた人の名前を書き、その紙を四つ折りにして私に渡してください」

男は青年から紙とペンを受け取り、死んだ男の名を大きく書き込み、四つ折りにした後、青年に渡した。

青年はその紙を受け取ると、布のほぼ中央部分に置いた。そこは、魔方陣のちょうど中心の部分だった。

「この世の精霊達よ、古の力を解放し、さまよう魂を救いたまえ！」

そして男がテーブルの上に、どん！と赤い液体が入ったビンを置いた。

「まあ、飲みながら話すよ。あんたも飲みたかったら飲みな」

男は近くに転がっていたコップをテーブルの上に置き、赤い液体をコップに注いだ。

「・・・それはお酒ですか？」

「ああ、ワインってやつだ。ブドウ酒って言ったらわかるかな？」

「ああ！ブドウ酒ですか。この町ではワインと言っんですね」

男はコップに満たされたワインを一気に飲み干し、ふうつと息を吐いた。

「じゃあ話すぜ。割り込みはなしだ」

青年はどこからともなく自分のマグカップを取り出し、ワインを注いだ。

「昔々、仲が良い子供の三人組がこの町に住んでいました・・・」

男の話は約一時間に渡って語られた。青年はちびちびとワインを飲みながら、その話を聞いていた。

昔、デルカの町に、とても仲の良い幼い三人組がいた。男の子が二人、女の子が一人だった。三人はいつも遊ぶときは一緒に、町の隅々を冒険したり、町外れの行つてはいけな森へ探検したりしたそうだった。

他にも色々な悪いことをしており、それが見つかったときなんかは、三人一緒に罰を受けたそうだった。だが、人に親切なことをしたときも少なくはなかった。一躍有名になっていたときもあったようだった。

三人組は成長していき、全員が十五、六歳の頃、三人の中の一人の男と一人の女が恋に落ちてしまった。二人の関係はとても良かったので、残った男は、そのカップルを応援するようになった。しかし、不幸な事件があった。

二人が地下鉄に乗ってデートコースの場所へ行こうとしていたとき、強盗か何かで逃げてきた犯人が、包丁を振り回し、不運にもその包丁の先が、カップルの男の心臓に刺さったのだ。

男は急いで病院に運ばれたが、病院に着く前に息を引き取ってしまった。心臓を刺してしまった犯人は、人を殺してしまったという罪悪感に襲われ、自殺したという。

女は何日も泣き続け、応援していた男も同じように泣き続けた。そしてその男の葬式が終わると、話し合いの結果、二人とも別々に生きることを決めた。

そして現在、カップルを応援していた男がここにいると青年に言った。

「……気の毒なお話ですね」

「ああ、あいつはなあ、とつてもいい奴だったんだよ。三人組の中でもリーダーだったし、とつても優しい奴だったんだよ。なのに！」

男はテーブルを拳で叩いた。

「なんで死んじまうんだ！あいつは何一つ悪いことはしていないかった。なのに……なぜだ！」

男はもう一度テーブルを叩いた後、今度は泣き始めた。

しばらく男は泣き続け、泣き止んだ後、青年が口を開いた。

「ワイン、ありがとうございます。何か私にお礼をさせてください」

「ワインぐらいいいよ。飲め飲め！お礼なんか気持ちだけでいいよ」

男は半ばやけになった気持ちで、コップにワインを満たした後、一気に飲みました。

青年は自分のマグカップに残っていたワインを飲み干した後、信じられない言葉を言った。

「あなたの友人が生き返ったとしたとでもですか？」

男は飲んでいたワインを噴出した。その後、目を丸くして青年を見た。

「おいおい、あんた酔って変な冗談でも言えるようになったのか？」
「残念ながら酔ってもいませんし、冗談でもありません。私は人を
生き返らせる術を持っています。まあ、口で言っても信じてはもら
えないでしょうが……」

「確かに。実際にそれをやってくれないと、誰も信じてはくれな
いだろうさ」

「試してみますか？」

青年は余裕の笑みを浮かべながら男に聞いた。

「ああ、でも酔いを冷ましたいな。寒いが外でやってくれるか？」

「ええ、わかりました」

そして場面は始めのほうにさかのぼる。

「では、私はこれで」

「ああ、いろいろとありがとな」

青年は男に会釈えしゃくをした後、通りを曲がり、男の視界から姿を消した。

日が地上から顔を出してしばらくした時、喫茶店などの店が開店
し始めた。青年はその中の一つの店に入り、軽く朝食を取った。

その後飾られているオブジェを中心に、にぎわっている人混みの
中に青年は入っていき、一通り飾られている全てのオブジェを見た
後、この町を出た。

人混みがいつまで経っても落ち着かなかったせいか、青年が町を
出たのは夕方頃だった。

「やはり有名だけあって、きれいなオブジェだったな」

青年は他にこんなこともつぶやいた。

「できれば……お前と一緒に見たかったな」

青年に友人を生き返らせるよう頼んだ男は青年と別れた後、祭り
には参加せず自分の部屋でただひたすらに手を胸の前に組んで祈っ
ていた。死んだ友人が本当に生き返っているのか不安があったのだ。

夜になると男は雪が降る町の通りを歩き、不安と期待を抱きながら墓地へと向かった。

男が墓地の入口にたどり着くと

ドンドンドン！

三発の銃声が聞こえた。

「ッ！？」

男は銃声のほうに足を走らせた。そこには銃を持った女性と、頭から血を流し、倒れている男性がいた。女性も倒れている男性も、男と年齢が近かった。

「アン……これは？」

アンと呼ばれた金髪の女性は男のほうに振り向き、持っている銃を投げ捨て、泣きじゃくりながら男の体にしがみついた。

「シース！シース！ち……違うの。私は何もやっていない」

「落ち着け、何があつたんだ？」

シースと呼ばれた男、あるいは青年に友人を生き返らせるよう頼んだ男は、わかつてしている質問をアンにした。

「セプトが……セプトが……死んだはずのセプトがそこにいたの」

シースは倒れている男に視線を向けた。男の頭の周りから、赤い液体が地面に広がっている。

「私……怖かったのよ。だって……土まみれで死んだはずの彼……が……私にしがみついてきたもの」

「それで怖かったから、護身用の銃で撃つたのか？」

「だって……仕方なかったのよ。セプトのお墓参りに行ったのに……本人が生きているんですもの」

「……」

シースはしばらく何もせず黙っていると、いきなりアンを突き飛ばし、空に向かって高々と笑い始めた。

エピソード

リマ・レイアンは、ある古びた遺跡の最奥部にいた。この遺跡はかつて、レイモンド・クニールとその仲間達が研究をするために来ていた遺跡である。今はもう使われておらず、人々からもほとんど知られていない。ただ朽ち果てていくのを待つだけとなってしまっている。

リマは最奥部にある、謎の魔法陣をみつめていた。その魔法陣は、リマが人を生き返らせるときに使う布と全く同じ魔法陣だった。

「たとえ真実をお前に話そうと、お前は私を恨むのだろうな」

リマはペンダントのそこにいる一人の青年と一人の女性の写真を見ながらつぶやいた。二人とも笑顔でこっちに手を振っている。

「私は多くの人を殺した。そして多くの人を生き返らせた。しかし、私は神ではない。全てが幸せに終わることなど無理なのだ。だとしたら……」

リマ……レイモンドが軍事医学技術研究員だったころ、そして目の前の魔方陣が、人を生き返らせることができ、また人を楽に死なせることが出来るとわかったころ、レイモンドは、周りには変わった人たちがいるとわかった。

例えば、一見真面目そうな人だが、実はとても死にたがっていたり、自分の娘や孫達が大きな事故に巻き込まれて悲しみに浸っている老婆などだ。

レイモンドはある時、死にたがっている人に、楽に死なせてあげましょうか？と聞いた。その人は大喜びでレイモンドに死なせるよう頼んだ。

そして、自分が死んだとき、人体の実験として使ってくれとも言った。レイモンドは魔方陣の布を使い、その人の魂を肉体から離した。その後、約束どおりレイモンドは死体を人体実験に使い、治らないと言われていた病気の治療法などを見つけた。レイモンドはそ

れを発表し、多くの人を救った。

また、あるときは老婆の娘や孫達を生き返らせ、その老婆に再び幸せな生活を取り戻させてあげた。老婆は娘達を生き返らせてもらった際、自分が死んだとき、人体実験に是非使ってくれとレイモンドに頼んだ。

そしてその老婆はまだ生きています。まだ寿命ではないらしい。そして、その肉体は実験には使われないことだろう。

レイモンドはもうこの世にはいないのだから。

レイモンドは影で人体実験を行った。公の場で人体実験をしては、誰であろうと自分が人を殺したと勘違いされる可能性が高いからだ。レイモンドは使われていない研究室を見つけ、そこに実験道具を揃え、研究員が全員帰った後、ひとりで実験を行った。

そして、レイモンドは不治の病といわれていた病気の治療薬を作り上げた。それを発表したおかげで、レイモンドは英雄として称えられた。

レイモンドが英雄となった後、レイモンドは実験で使った男を棺に納め、彼の墓の中に埋めた。しかし、棺を埋めているとき、研究員の一人に見られてしまった。

その研究員はなんと、レイモンドの恋人だったのだ。

恋人も驚いただろうが、レイモンド本人も驚いたことだろう。自分の恋人に偽りの真実を教えてしまったのだ。レイモンドは最近になって、こんなことを思いつめていた。

（見つかったとき、魔法陣の力で殺しておけばよかったのかもしれない……）

しかし、その考えは今でも否定している。自分にとって最愛の人を殺すことなんてできない。偽りの真実を持った恋人とは別れたほうがいいとレイモンドは悟った。例えば恋人が自分のことを世間に言

ったとしてもだ。

レイモンドの予想通り、恋人はレイモンドを恐れたのか、世間に偽りの真実を言ってしまった。そしてレイモンドは捕まり、クロム砂漠へと放たれ、今に至る。

(あいつには幸せな生活が送れることを祈ろう)

レイモンドは魔方陣の布を石版に刻まれた魔方陣に掲げ、呪文を唱えた。魔方陣の第三の力、空間移動をするためだ。

「精霊よ、神よ、古の力を解放し、並列の世界へ導きたまえ」

魔方陣の布が光の玉へと変わり、石版の魔方陣の中へと吸収されるように入ってしまった。すると突然、石版は巨大な別世界への入口と変化した。

「これは持つていくか……」

レイモンドはペンダントのふたを閉じ、ポケットの中に閉まった。

「偽り……か。人にとつては真実が偽りとなる。だが」

レイモンドは別世界への入口へと入ってしまった。

「私には関係のないことだ」

こうしてレイモンド・クニールはライルーク大陸から姿を消した。

そして現在、どの世界のどの大陸に住んでいるかはわからない。ひよっとすると、私達の世界のどこかにいるのかもしれない。もしも彼と出会ったとき、彼はきつとこんな不思議な物語を聞かせてくれるだろう。

人が生き返るといふ物語を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2477c/>

デッド&リバース

2010年10月28日06時07分発行